02

長久手市「さかそう ながくて じちのはな」の楽曲制作にあたって

長久手市みんなでつくるまち条例

Musical composition of Nagakute-shi "Sakasou Nagakute Jichino Hana"

NagakuteCity Municipal ordinance made by everyone

映像メディア学科・准教授
Department of Visual Media・Associate professor
森 幸長 *Yukinaga MORI*

はじめに

長久手市では、平成30年3月、市民主体のまちづくりの実現を目指し、まちづくりの基本事項を定めた「長久手市みんなでつくるまち条例」が制定された。その条例をつくる過程において、「まち詩（まちうた）」と呼ばれる詩を長久手市民と職員が一緒に考え作り上げるというユニークな取組が行われた。その詩に曲をつけたいという長久手市の熱い思いから、まち詩に楽曲を制作することとなった経緯と楽曲制作について述べる。

1.1 さかそう ながくて じちのはな制作に至る経緯

「長久手市みんなでつくるまち条例」の制定に向けた取組の中で生まれた市民と職員が一緒に作り上げた詩、「まち詩（まちうた）」は、主人公の長男（ボク）目線で描かれており、お父さん、お母さん、お姉ちゃん、おじいちゃん、おばあちゃんの計6人の家族が登場する。長久手市の特徴、課題、まちづくりの理想を語る家族の団らんの様子を詩に表している。市から作曲の依頼を受けたのは平成30年6月。実は、市から依頼を受ける約1年ほど前に、筆者と縁のある映像プロダクション、株式会社中日本制作所の映像作家、増田達彦氏から、みんなでつくるまち条例制定に向けた取組に参加していた大庭卓也氏（長久手市民）を紹介され、大庭氏から、「試しに、まち詩に曲をつけてみてくれないか」と依頼された。後の、市からの依頼で制作した楽曲は、大庭氏からの依頼により制作したデモ曲を元にしたものである。条例づくりの過程に、市民として深く関わってきた大庭氏曰く、「条例案の議会審議において、制定に反対する市議会議員もいたが、市民の思いを受けた長久手市長の強い意志と努力が伝わり、可決に至った」と、聞いている。愛知万博の成功や、長久手町政から長久手市政への移行、株式会社東洋経済新報社が発表した「全国住みよさランキング2018」では全国第2位になるなど、市民のまちへの愛着や誇りも一層高まってきていることと思う。筆者の父が長久手で働いていたこともあり、学生時代、父の草野球チームに入り、長久手在住の父の仲間と共に白球を追いかけていた記憶も相まって制作を受ける決意となった。

1.2 内容

大庭氏からの楽曲に対する曲調リクエストは、なんとラップであった。もともと詩を制作した時は、ラップにするアイディアはなかったため、詩でポイントとなる、「韻」や「文字数」などを意識して書かれたものではなく、淡々とそれぞれ家族の思いを綴った詩だったので、制作していく上でかなり大変になるだろうと思った。大庭氏が自身で唄った仮歌も参考に、ラップ調のパイロット版となるデモ曲を2曲ほど制作した。以下に市民と行政が考えた、詩を明記する。

さかそう　ながくて　じちのはな

1番
ボクの家(うち)　長久手に住んで12年
じいちゃんばあちゃん　愛犬は
生まれも育ちも　わがまちだ
そんな　わが家の団欒(だんらん)で　大切なこと　考えた

2番
じいちゃんの　こんな自慢で始まった
わしらのまちの　長久手は
戦国の世からの　伝統と　清き流れの　香流川
緑豊かな　里山と　リニモが結ぶ　街並みや
万博の知恵と理想が　誇りだな

3番
ところが　ばあちゃん嘆くのは
近頃　この頃　長久手は
隣が誰だか　判らんと　気にしない人　多すぎで
関わり合いが　薄すぎじゃ
やがてくる世の　高齢化
このまま　ほかっておけんのじゃ
防犯　防災　だいじょうぶか?

4番
そこで　とうさん　高らかに
このまま行けば　長久手は
子らに伝える　輝きを
失ってしまうまち　になる
ひとり一人が　主人公
懐の深い　コミュニティ
それぞれの価値を　認め合い
支え合うこと　目指すべし

5番
さらに　かあさん訴えて
みんなの居場所を　つくるには
わずらわしいこと　多いけど
会話・対話を　繰り返す
回り道でも　いいじゃない?
やってみることこそ　大切で
失敗したって　いいじゃない!

6番
ねえちゃんとボクが　願うのは
いつまでも続く　青空と
緑と命が　守られる
住んで　遊んで　働きたい
心豊かな　ふれあいは
まずは　あいさつ「こんにちは!」

7番
でもボクの　ともだちは
言っていることは　分かるけど
理想ばかりで　マジ出来る?
いやがる人も　いるだろう

8番
家族が　近所が　動き出す
いろんな人の　いるまちは
聞く耳もつこと　大切で
あの人　この人　さまざまな
考え　まずは認め合う
熱い決意を　胸に秘め
長久手人(ながくてびと)は　起ち上がる

9番
みんなが知り合い　混ざり合い
関わり合って　支えあう
やさしいことでは　ないけれど
言ったコトバと　行動に
責任をもって　取り組もう

10番
自分がまちに　出来ること
最初の一歩を　踏み出そう
今ある暮らしを　もっと良く
キラキラ光る　長久手を
今日の市民が　つくるため
明日の市民に　渡すため・・・

長久手絵手紙を楽しむ会のみなさんが制作した、まち詩を題材に挿絵なども盛り込んだポスター(図1)。長久手市みんなでつくるまち条例の案内パンフレットなどにも記載されている。

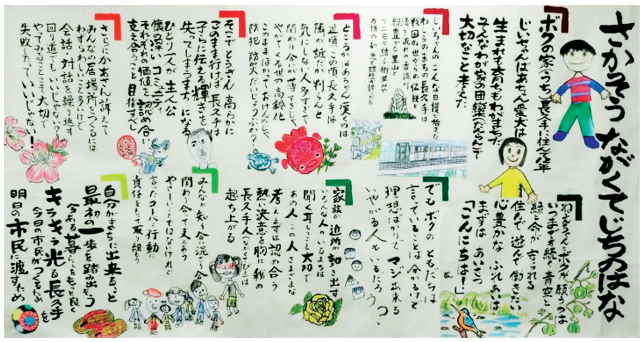

図1／まち詩を元に長久手絵手紙を楽しむ会のみなさんが制作したポスター

詩は10番まであり、詩と歌を覚えやすくするためには、一度聴いたら忘れないメロディーラインが必要で、特にサビは重要である。しかし、詩の区切りや行数は一定では無く、長さが違ったり、字余りであったりと、歌うための意識をして作られた歌詞では無かった。ラップというジャンルにおける多くの唄のメロディーライン(歌い方)は同じ音程が多く繰り返され、時折音程を上げ下げし、抑揚をつけたりする。加えてリズム楽器やコードトーンを加えるシンセサイザー、鍵盤楽器などもマイナーコードを多く使用している。この同じメロディーを繰り返す唄い方やマイナーコードの印象は聴く人によるが暗く感じられることが往々にしてある。そのために、唄のメロディーラインは同じ音程を続けるのでは無く、なるべく話をしているような感じで、他の楽器のコードトーンに従う音程から歌い始めを行い、リズムを意識し制作した。ラップ調の唄を楽譜に表すのは、言葉の中で複雑な音程変化があるため、ピアノのような楽器で表される楽譜制作は非常に困難であるため割愛するが、導入のつかみとしてApple社のLogicProX内にあるLoop音源のギターを採用し、サビを感じさせるブラスセクションのメロディーを制作した。以下にイントロで採用した。ギターのフレーズとホーンセクションの楽譜を明記する(図2)。

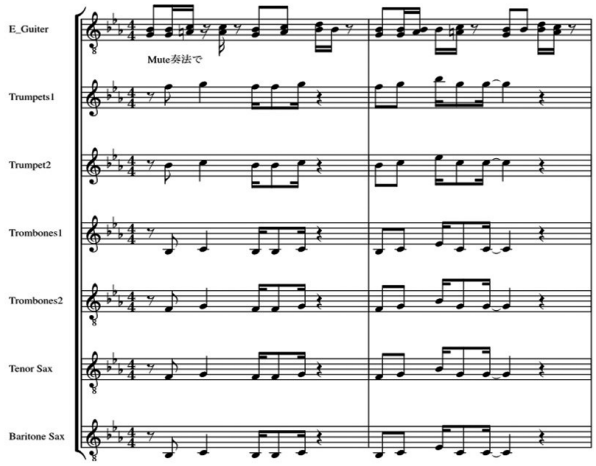

図2／ギターとホーンセクションの譜面Apple Logic ProX スコア画面より

詩の改変は基本認められないという、当初からの長久手市の意向でありましたが、どうしても全員が簡単に合わせて唄うために、詩のタイトル「さかそう　ながくて　じちのはな」をサビのメロディーにし、デモをお渡ししたところ、覚えやすくキャッチーなメロディーであるということで、気に入っていただき、採用に至った。

詩の5番の「回り道」からメロディをいれている(図3)。

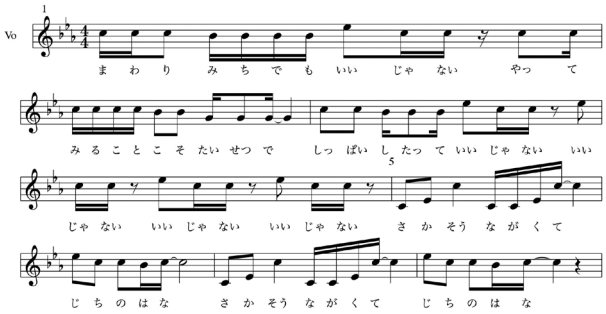

図3／5番の「回り道」からサビにかけての楽譜

唄は親子バージョン、お父さんバージョン、学生バージョンの3タイプ用意した。コーラスには名古屋学芸大学メディア造形学部映像メディア学科　森ゼミの15期生16期生の学生に参加していただいた。以下に参加メンバーを記載する。

お父さんバージョン　唄　森　幸長
親子バージョン　唄　森　幸長　森　春樹
学生バージョン　唄　中村　航
コーラス　(森ゼミ15期生)　大塚 香音、久野 沙織、小林 永佳、
中村 航、安田 彩乃、
(森ゼミ16期生)加藤　世理奈、坂野上 敬、
武仲 晃子、田村 壽章、降幡 光一、吉崎 彩香

2 長久手市の取り組み

2.1 長久手市みんなでつくるまち条例(まち詩「さかそう ながくてじちのはな」を含む)に係るこれまでの経緯

長久手市において平成30年3月に制定された「長久手市みんなでつくるまち条例」は、平成24年度から制定に向けた取組が開始された。平成28年度から、市民と職員で構成する検討委員会を立ち上げ、具体的な条文内容の検討がなされ、その過程で「まち詩」(歌詞)が制作され、のちに楽曲の制作に至った。以下に、平成28年度以降の経過を記す。

【平成28年度】

9月～　市民と職員で構成する条例検討委員会(愛称 自治KEN)を設置(以後、条例に盛り込みたい内容を、全7回ワークショップ形式で検討)。

12月　第5回自治KENにて前文ライティングチーム(リーダーの大庭氏ほか4名)が発足。

1〜2月　条例の前文ライティングチーム会議を3回実施し、後に、まち詩となった詩を含む条例の前文案が完成。

3月　第7回自治KENにて、まち詩を含んだ前文案を披露し、自治KEN全体で合意。

※後の協議により、条例文としてはまち詩の言葉遣が馴染みにくいことや内容が普遍的でないことを理由に、条例の前文として採用はしないこととしたが、以後、条例とまち詩を一体として活用していくことを決定。

【平成29年度】

8月　大庭氏が、個人的な取組として、まち詩のパイロット版の制作を依頼

3月　条例制定

【平成30年度】

6月　市が、パイロット版を元にしたまち詩の楽曲制作を決定、依頼

7月　まち詩(親子バージョン)が完成

8月　まち詩(お父さんバージョン)が完成

10月　まち詩PR動画が完成

納品後、長久手市長と面会し、「長久手市みんなでつくるまち条例」の普及に向けた今後の活動を、お聞かせいただいた。まち詩、「さかそう　ながくて　じちのはな」を多くの市民に伝えていきたいとのことでありました(図4)。

図4／長久手市長との面会

2018年7月に施行された「長久手市みんなでつくるまち条例」のPR活動として、同年9月より制作期間1ヶ月を要して長久手市の子供からお年寄りまで、36の団体、グループ、述べ市民約600名の参加でPR動画も制作された(図5)。

図5／PR動画収録の様子(長久手市提供)

おわりに

当初は「市の条例づくりから生まれた詩をラップにする?!」と、前代未聞のアイディアに驚いた筆者であったが、なんでも、「初めて」にはいろいろな不安材料がつきもの。しかし、そんな不安は、曲を制作していく過程の中でどんどん消えていき、引き込まれてしまう面白さが詩にあることを痛感した。また、良い意味での奇抜さが、話題を呼び、多くの方に共感を得ているのだと思う。

「今日の市民が作るため、明日の市民に渡すため」

未来の長久手市民の方たちに繋ぐこの活動は、平成30年10月18日・19日に行われた「第1回地域共生社会推進全国サミットinながくて」のシンポジウムでも紹介され、長久手市から全国に広がりつつあります。市民のみなさん、大庭氏をはじめ、長久手市役所のみなさんや、気がつくと筆者の家族も口ずさみ、コーラスをお願いした学生のみなさんにも覚えやすいと言われた「さかそう　ながくて　じちのはな」がこれからも長久手市で末長く唄われていくことを願う。

資料提供

[1]長久手市役所　経営企画課